



新米賢者ちゃんのおっぱい改造ダンジョン

- 気弱で貧乳の少女は、淫乱で爆乳の苗床に作りかえられる -

「男の人...」
ソレはきこえなく
胸に自身を
擦り付けた。

谷間を手

ん

れえ♡♡

空気
した乳首
撫でな

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

冒険者ギルド

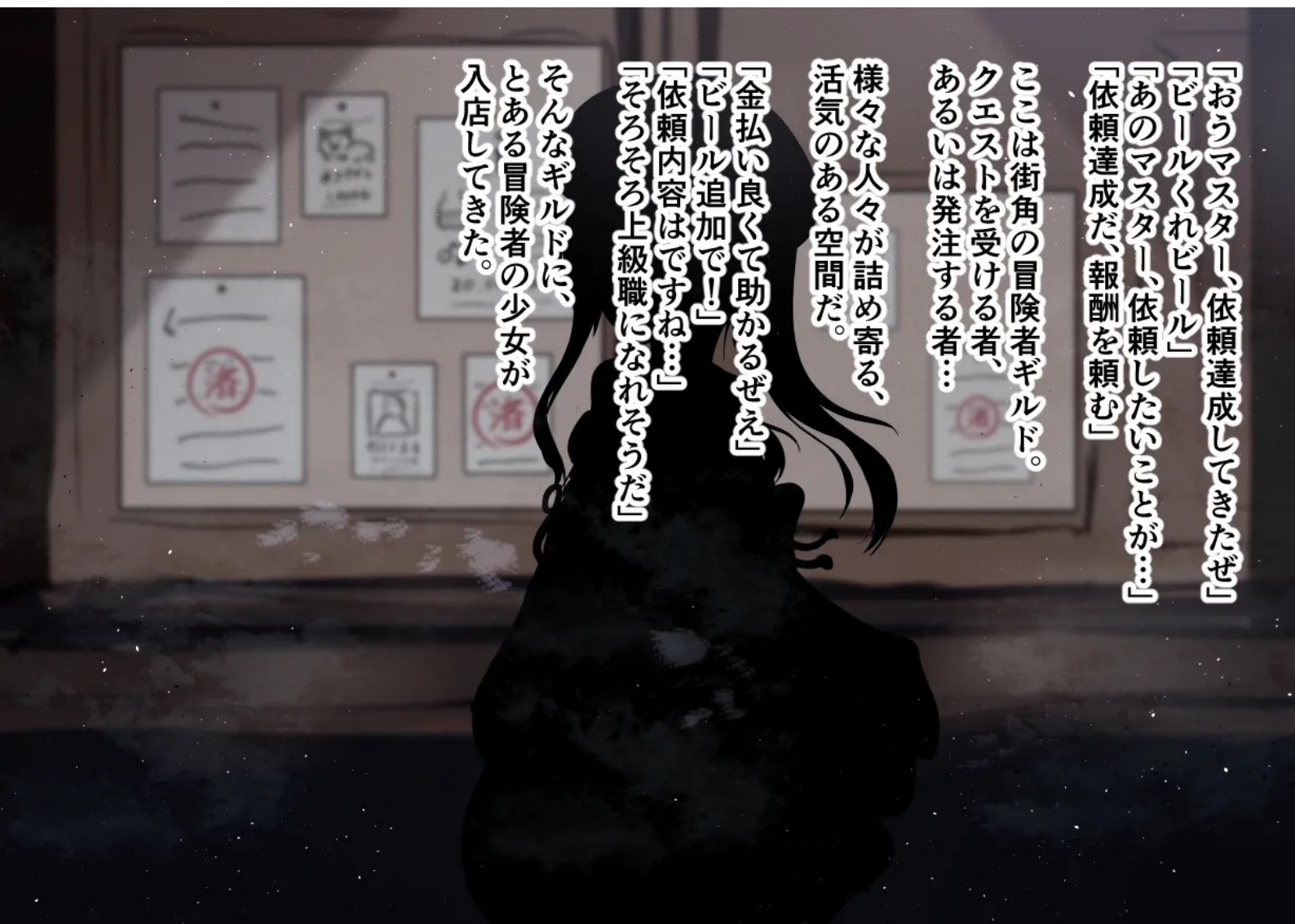
「おうマスター、依頼達成してきたぜ」
「ビールくれビール」
「あのマスター、依頼したいことが…」
「依頼達成だ、報酬を頼む」

ここは街角の冒険者ギルド。
クエストを受ける者、
あるいは発注する者…

様々な人々が詰め寄る、
活気のある空間だ。

「金払い良くて助かるぜえ」
「ビール追加で！」
「依頼内容はですね…」
「そろそろ上級職になれそうだ」

そんなギルドに、
とある冒険者の少女が
入店してきた。



「おはようございます」
「依頼を探しにきました！」



「あ、マスターさん、おはようございます」
「ちようにいい討伐依頼でも入ってませんか？」

ギルドマスターは二枚の紙を
カウンターに差し出した。

「…魔物さんの討伐依頼、ですか」



「なるほど…」

「魔物の棲家を村人さんが目撃…」
「これを調査、討伐せよ、ですか」

「分かりました、お受けします！」
「賢者たるもの、これくらい朝飯前です！」

「え…賢者は賢者でも新米じゃないか？」
「お前にちゃんとできるのか…って」

「バ、バカにしないでください！」
「私一人でも問題ありません！」

ギルドマスターは笑いながら、
正式な受諾書とペン、
半額の前金を提示する。



「名前、クノールヒューズ」

「職業、賢者…」

「なんですか、新米なんて書きませんよ！」

「…はい、必要事項は埋めました」

「じゃあ行って来ますよ」

「すぐ終わらせて見返してあげます！」

このような経緯で、
新米賢者クノは
魔物討伐に向かったのである。
ギルドを出発し、
最寄りの村で身支度をする。
そして、早速魔物の目撃地点へと
足を運ぶのだった…



「いい天気ですね。空気もおいしいです」
「さて、この辺りが目的地の筈ですけど…」

村から数分歩き、自然豊かな道に出た。
魔物と出くわすことも無く、
遠足でもしているようである。

しばらく辺りを探索していると、

「あ…もしかしてアレでしょうか？」
「あれは…洞窟かな？」

山の麓に、周りの自然とは違和感のある
人工物のようなダンジョンを発見した。



「ここが魔物さんの根城でしょうか…」
「うう…思ったより暗いです…」

トンネルのような穴。
怖さで脚がピタリと止まった。

「ちょっとこわいです…」
「私一人で大丈夫でしょうか」

うる
うる
うる



「い…いえ！」

「立派に一人でやらないと！」

気合いを入れるクノ。

「お金は貰ってるんですから」
「ちゃんと討伐しないとです！」

きいっ

ん



こうして、新米賢者クノは
不気味なダンジョンへと
足を踏み入れていった。

どんな目に合うとも知らずに……



「ここが魔物さんの巣ですか…」
「思ったより普通ですね」

クノは色あせた洞窟を進んでいく。

「早く退治して、皆さんを安心させましょう」
しばらく歩くと、ひらけた部屋に出た。
そこに踏み入れた瞬間のこと。



床が大きな音を立てた。

『あつ！ い、一体なんですか!?!』

突然のことに驚いていると、

方々から何かが動く音が響く。

『もしかして…：トラップなんじゃ…：』

クノの悪い予感、残念ながら的中した。



「な、何が起きたんですか!？」

ピンク色の煙が部屋に充満していく。

「これは…とにかく離れないとです!」

びく

ひゅ

ん

ジ
ュ

ウ

ウ

ウ

ウ

「あ、あれ身体が痺れて…熱い…です」

部屋から出ようとするも、足が動かない。

「あ…ダメ…立って…いられ…な…」



「身体が…ぴりぴりして…っ」
「あ…う…」

「ふ、服が擦れて…変な感じ…です…」
「おっぱいの先っぽ…が…あっ♡」

「…は…っ…は…っ…」
「いけ…ません…意識が…」



『……』

クノの身体は麻痺し、意識は朦朧としている。

『すう……はあ……』

すでに大量の煙を吸い込んでいた。

これが媚薬混じりの催眠ガスであることに
気づく間も無く、眠りに落ちてしまう。

『うう……』

火照らせた身体を、無防備に晒しながら。



煙で気を失い数分―

『うーん…』

『はう…あれ…ここは…？』

ぼんやりとした意識のまま目を覚ます。
状況を知るため、周りを見渡した時だった。



「な、何ですかこれっ!」

クノは触手に拘束され、
地面に寝かされていた。

「身体が痺れて…動けないですっ」

煙を吸い込んだ身体は
いうことを聞いてくれない。

「魔物さんっ、離してくださいっ!」

彼女の懇願むなしく、触手たちは迫ってくる。



『ひゃっ!』

服を触手に剥かれ、
小ぶりの乳房が露わになる。

『な…』

ひゃっ

ほろろ

ぬる

ぬる

ぬる

ひんやりとした空気が、
媚薬の煙で紅潮した乳首を撫でた。

『身体が変だと思ったら乳首が…じゃなくてっ』
『何をするんですか! 離してくださいっ』

しかし抵抗虚しく、触手たちは止まらない。



『な…なんですかこれっ！』

ぬちゅっ

ぬちゅっ

はくっ

はくっ

はくっ

はくっ

ぬる

ぬる

二つの触手が口を開け、乳頭に吸い付く。

醜い突起物を持ったツレは…

『んっ！』



「これっ、乳首吸われてっ♡」

ぎゅるるっ♡

ああ♡♡

ひゅ♡♡

お♡♡

「止めてっ、乳首伸ばさないでくださいっ♡」

触手の乳首責めは何分も、何分も止まらない。

「頭ぼんやりして力が…入りま…せん♡」
「な、なんでっ、こんなのっ、知らな」





「はあっ…はあっ…」
「う、今のは…」

未知の感覚に混乱するクワ。

「わからない…ですけど…なんだか…」



「気持ち…うう…」

強烈な刺激が、初めての快感として
刻まれてしまった。

「ダメ…です…逃げないと…なのに」
「意識が…ぼん…やり…と…」

『う……あ……』

『ん……』

『はっ』

『ま、また気を失ってしまいました』

『ここは……？ と、とにかく警戒を……』

目を覚ましたのも束の間。

「えっ、手足が…なんですかこれっ」
「ぬ…ぬけないっ」

あられもない姿勢で縛られたまま、
身体をよじるクノ。

「あ、あれ？」

「胸がなんだか変…です」

少女は目を下に向けた。



「えっ、おっぱいが……!」

眼下には確かに自分の、
しかし見たことのない
双丘がある。

ド
キッ

ん

「ま…まさか」

「寝てる間ずっと注射されっ」

しかし、もう手遅れだった。

ド
キッ
ド
キッ
ド
キッ

ド
キッ
ド
キッ
ド
キッ

ド
キッ
ド
キッ
ド
キッ



「んひひひっ♡」
「これっ、これおっぱいがあっ♡」

大量の薬品を注入され、
胸が肥大化していく。

「だめですっ♡」
「これとまっれえ♡」

たっ♡

ゆるん♡

はっ♡

お♡

情けなく爆乳を揺らし、
とめどなく嬌声が響く。
快楽に悶えているその時。



不意に触手が挿入された。
彼女の膣内に。



「ぐわん」
「ぐわん」
「ぐわん」



「んほおおつ♡」
「奥っ届いてえっ♡」
「だめですこれえへっ♡」

めっ
めっ

おっ♡
ほお♡

びん

びん

「むねっ重いですっ♡」
「おっぱい揺れるのらめえ♡」
「しゅごいれすうっ♡」

あっ♡
おっぱい♡



「あつ♡またきちやひますっ♡」
「これっ膣内につ♡♡♡」

イバ♡

あ♡♡

イバ♡
おほ♡

あ♡♡
あ♡♡

お♡♡

び♡

び♡
び♡
び♡

び♡

び♡
び♡

び♡
び♡

「おーっ♡」
「おーっ♡」

清楚さの欠片もない声をあげ、
10回以上もイカされるクノ。

「たしゅけっ♡らめれすっ♡」
「きもちいのやれすっ♡」

触手たちが満足する頃には、
気を失ってしまふ…



数十分後――

「膣内がドロドロして……うう……」
「おっぱいが……重い……」

意識が戻る。

しかし、肥大化した胸は
クノの心を再び打ちのめした。

「……こんな身体じゃ」
「もう賢者なんて……」

「……」

「わ、私が弱気になっちゃだめです！」
「どうにか脱出しないと――」

なんとか希望を見出そうとする彼女へ、
更なる恥辱が与えられようとしていた。



「うっつ…触手さんが触ると痺れて…」
「ああっ、おっぱいの間にまでっ♡」

触手が迫り、
谷間を手繰る。

びくーん♡

「こ、これつまりで
『男の人の…』」

ソレはぎこちなく
胸に自身を
擦り付けた。

くー

「ええっ♡」

ぽん♡



「あうっ…おっぱいっ♡」
「ゆらさなけださるっ♡」

別の触手が胸を抑えた。
乳圧を楽しむように、
ピストンを繰り返す。

「で…でも…これくらい」
「耐えてみせます」

そう決意した、
その瞬間。

ぬるっ♡
ぬるっ♡

ぬるっ♡
ぬるっ♡







「これっ吸われっ♡」
「おっぱいのなかっ♡」
「あがつてきましゅっ♡♡♡」

乳首を吸引され、
爆乳と化した胸で
触手をしごく。

「おっ♡」
「ひんっ♡」

「むねらけでっ♡」
「おっぱいらけでっ♡」
「またくるうっ♡♡♡」

「お、♡」

「お、はい♡」
「りるっ♡」

「ひっ♡」

「これっ♡」
「お、♡」

「んっ♡」
「んっ♡」

「んっ♡」
「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」
「んっ♡」

「んっ♡」
「んっ♡」



『も、もう許してくらしゃ…ひっ♡』
『吸わにやいでっ♡♡♡♡♡』
『らめっ、またでましゅっ♡♡♡♡♡』

『ミルク搾られると気持ちしゅぎでっ♡♡♡♡♡』
『はああああっ♡♡♡♡♡…』

『…あーっ♡♡♡♡♡』
『…あーっ♡♡♡♡♡』

触手が満足するまで、
12回イカされてしまった…



『はっ』

『あ』

『私…また…あんなこと…』

『ま、魔物さんは？』

『いない…みたいです』

『満足したんでしょうか…？』

『身体ドロドロ…拭かないと…』

『こんなところ、早く脱出して…』

『うう…身体がへトへトです…』

「はあっ…はあっ…とにかく…」
「休憩しないと…です…」

肥大化した乳房を抱え、
敵の気配がしない場所に腰掛ける。
ようやく考える余裕が生まれたが、
すぐに、自身の身体について
思考が飲み込まれた。



「ひぐつ…私の身体…もう元には…」
「生ずつと…このままなんです…」

「…」

「何も着れないくらい…」
「おっぱいも乳首も…あそこも…」
「ジンジンして…」

改めて認識し、涙が溢れた。

そこへ、子宮に注がれた液体が
追いつけをかける。

ホオ…ッ



「すぐく身体…あつくて…」
「流石にお、おかしいですっこれっ♡」

「ひゃんっ♡ お腹があっ♡」



『こんな紋章で、いつのまにかいつ
ひつ、身体が火照りますっ♡』

『手がっらめっ♡』

『気持ちいいの欲しそうですっ♡』
『はやく脱出しなごとなのた♡』

『今乳首触ったりしたらー』





『おっ♡♡♡ ああっ♡♡♡』

淡い理性が弾け飛び、
乳首オナニーでいく。



そして指は勝手に動き、
乳首を刺激し続ける。

つまんでいく。
転がしていく。

いつたから母乳が溢れて、
母乳が出たから
またいく。





「ここは…覚えてます」
「入口近くの通路です」

「近くに出口があるはず…」

「…うう」

「…あの時の…元の身体に戻りたい…です」



「…い、今は帰ることだけを…」

出口に向かうクノ。

しかし、ぼんやりとした頭は、
畏のことに思い至らない。

「カチツ」

「乳首ピアスの畏だ！」

「へっ？」

「カチツ」

「カチツ」





「ち、乳首につ♡」

「ピアスが転送されっ♡」

「歩くと揺れて…♡」

「じんわり気持ちいい…♡」

「こんなの付けてたら…」

「変態さんです…♡」

「ドクッ♡」

「ドクッ♡」

「ドクッ♡」

「はあっ…はあっ…」
「早くここから逃げないと…」

階段を登り、地上へ向かう。
徐々に日差しが刺し、
清らかな風が吹いた。

「空気に触れただけで…♡♡」
「このおっぱいは敏感すぎます♡♡」



「うう…でもこの日差しは…」
「あった…出口です…」
「これで…」

ようやく脱出できる。
疲弊した心が安堵した。
しかし、ふと思ひ至る。

「バ、バカにしないでください！」
「私一人でも問題ありません！」

（あんなこと言ったのに）
（負けた上にこんな…）

「すぐ終わらせて見返してあげます！」



（…クエストを失敗したなら）
（それも報告しなければなりません）

（…二度とまともな服を）
（着られないような…おっぱいのままで）

「ご…ごめんなさい…失敗です…」
「魔物さんに…いやらしく…改造されて…」

(おっぱい丸出しのまま)
(ギルドの皆さんに見られて)

(謝って、謝って)

「申し訳ないです…あっ♡」
「み…見ないでくださ…っ♡」



「視線だけでっ…気持ち…いいっ…♡」

(みじめなのに)

(おっぱいは気持ちよくなって)

「…っ♡♡♡」

(声を抑えながら)

(逃げるように立ち去って)

「これから…どうしたら…」

(恥ずかしい身体を見せられないから)
(地元の街も、知り合いも頼れず)

「あつ、風でっ♡ 乳首がっ♡」

(どこにいても、大きなおっぱいと乳首は)
(快感を生み続けて)



「らめっ♡」

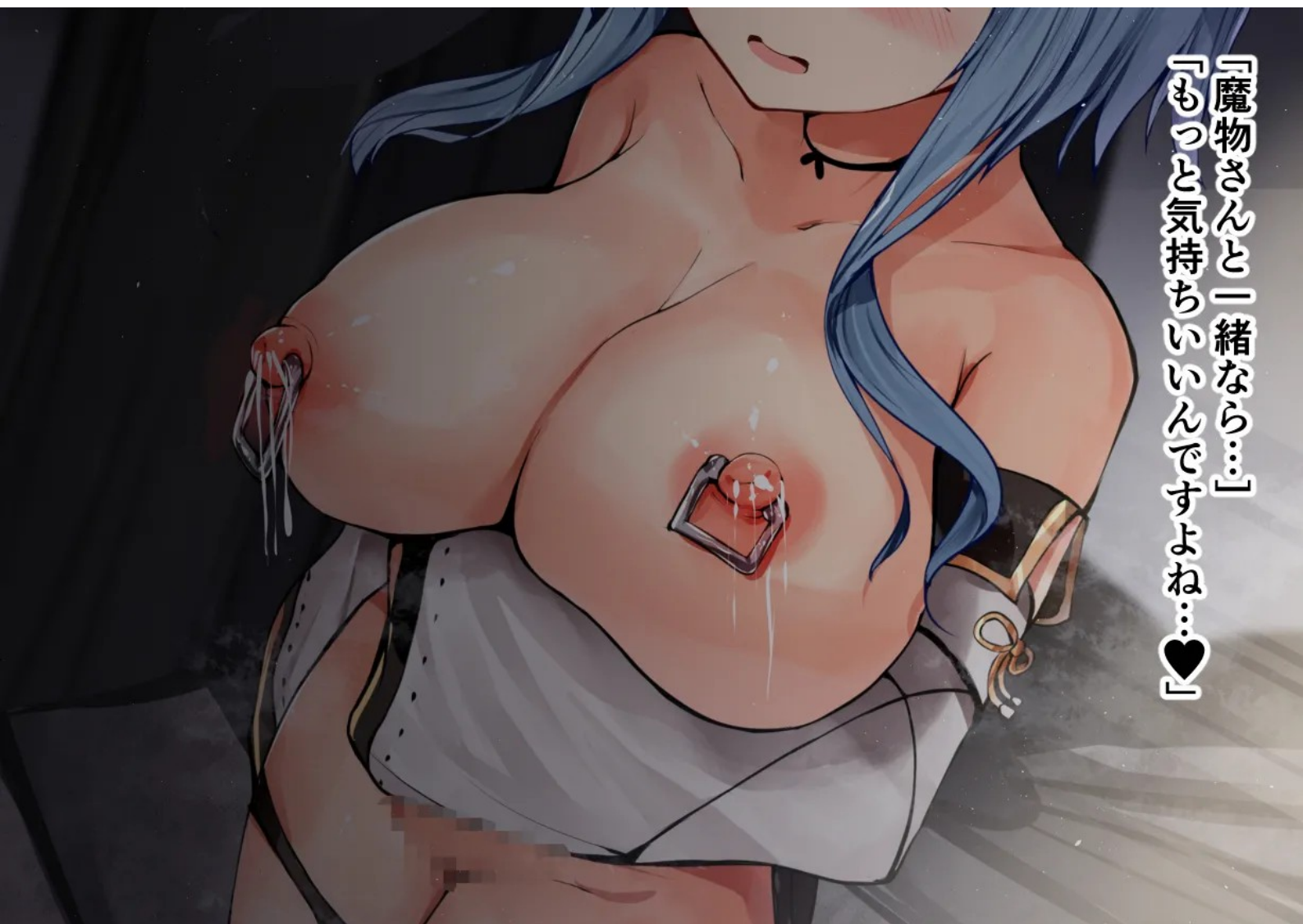
「こんな身体にされてっ♡」

「もうどうしたらいいんですかっ♡♡」

(賢者としても)
(人間としても)

(普通に生きていくことさえ…)

「魔物さんと一緒なら…」
「もっと気持ちいいんですよね…♥」



「マスター、依頼はあるかい？」

「ほう、魔物討伐」

「ああ、クノちゃんが向かったんだ」

「そういえば最近見ないね」

「まあ、冒険者の基本は自己責任だから」

「もし必要なら向かおうか？」

「そうだな、金額は――」

ダンジョン最下層にて

「あはっ♡」
「奥届いてますっ♡」
「またミルクでちゃう♡」

触手の苗床となり、
永遠に種付けされる。

彼女にとってなんとも、
甘美な選択肢だった。



「膣内でビクビクしてます♡」
「じっかり孕んでっ♡」
「もっとミルク出しましゅっ♡」
「幸せなのくりゅううっ♡♡♡」

「あああ♡♡♡♡♡」

「ミルクいっぱい♡」

「イってるのバレちゃいましゅ♡」

「あはあ♡♡♡」

「イってるのにいっ♡♡♡♡」

「いいれすよ♡♡♡」

「好きなだけ使って♡♡♡♡♡」
「わたしを壊してえ♡♡♡♡♡」





「はーっ♡」
「はーっ♡」

「あひっ♡」

「まだしたいんれすか♡」

「えへっ、使ってくれてうれしいれすっ♡」

「こんな身体に改造されたらっ」

「一生ここにいたくなりますっ♡」

「それじゃあ魔物さん：♡」

「ずーっと一緒ですよ♡」





新米賢者ちゃんのおっぱい改造ダンジョン

・気弱で貧乳の少女は、淫乱で爆乳の苗床に作りかえられる・

「男の人」
ソレはきこなく
胸に自身を
擦り付けた

「男の人」
ソレはきこなく
胸に自身を
擦り付けた

ぬる
ぬる
ぬる
ぬる

はる
はる
はる
はる

れえ
れえ
れえ

る
る
る
る

こ
こ
こ
こ

は
は
は
は

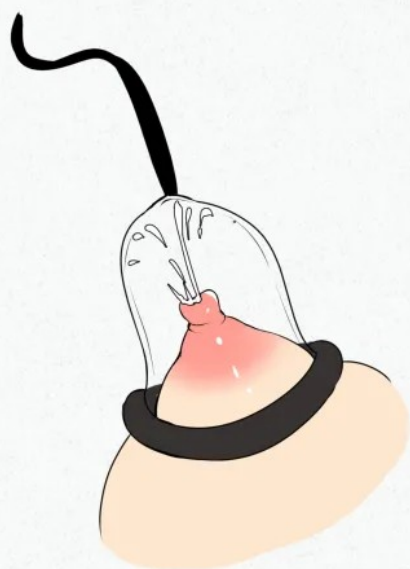
魔物大辞典 七十一項
「ダンジョンローパー」

この種は赤い触手、青い触手の二つに分けられる。赤い触手は注射器のような鋭い器官を持ち、固有の液体を注入する。主に乳首や乳輪を狙い、注射されれば、一時間ほどで乳房が大きく肥大化する。



乳房の変化。バストは最低でも20増加する。

これにより獲物の移動力を奪いつつ、母乳体質へ改造する目的のようだ。肉体の異常成長を促しているため、現状変化した身体を元に戻す手段は見つかっていない。捕まった場合に備え、決して一人で生息地へ向かわないことが推奨される。



敏感な母乳体質のため、被害者は日常生活でも搾乳機が必須となる。

名前: クノ
職業: 新米賢者

HP: 15/15
絶頂: 0回

【状態】
正常

【特技】
聖魔法
回復魔法



名前: クノ
職業: 苗床

HP: 0/15
絶頂: 272回

【状態】
乳房肥大化
母乳体質
催淫
常時発情
淫紋
オナニー好き
乳首ピアス
快感耐性低下

【特技】
パイズリ
乳首イキ
連続絶頂
大量妊娠
噴乳

